

# 強行遠足



## 強行遠足の歴史

北見北斗高校という『強行遠足』。

同窓生が集まると、必ず強行遠足の話になります。

本校の強行遠足の歴史については、平成5年3月30日に「北海道北見北斗高等学校 強行遠足六十年史」が刊行されています。このページは、本冊子を参考にまとめさせていただきました。ただし、「六十年史」で使用されています文言につきまして、現在の高校生が理解できるように一部表現を変更させていただいています。また、「六十年史」に記載されている人物名ですが、校長名と優勝者名を使わせていただきました。写真につきましても、当時の雰囲気や伝わるもののみを使用とさせていただきます。ご了承ください。

**注:本文を読まれる前に、戦前の学校制度を説明しておきます。**

大正11年に「野付牛中学校」(現:北海道北見北斗高等学校)が開校した当時、義務教育は6年制の「尋常小学校」(1941年からは「国民学校初等科」)でした。尋常小学校卒業後は、5年制の男子の教育機関である「中学校」、女子の教育機関である「高等女学校」、その他2年制の「高等小学校」、「実業学校」等に進学していました。

第二次世界大戦後に教育改革が行われ、昭和25年(1950年)、本校は北見北斗高等学校と改称され、それまでの男子校から男女共学となりました。戦後には現在の3年制の義務教育である「中学校」が誕生したことから、前後の中学校を「旧制中学校」とよんでいます。ちなみに、1936年の統計では、旧制中学校・高等女学校・実業学校といった旧制中等教育学校に進学する者は21%、まったく進学しない者は13%、高等小学校に進学する者は66%となっています。

## 強行遠足が始まるまで

大正 11 年(1922 年)4月、野付牛中学校(現:北見北斗高等学校)が開校した。しかし、校舎はまだ無く、西小学校に間借りしての授業だった。机も椅子も借物で、体育館やグラウンドなど、校内外の生活にも不自由な思いをしていた。そのような生徒に、初代校長の佐藤猪之助氏は、「不自由を我慢せよ、リンカーンも丸太小屋で育ったんだ」という話をしていたという。佐藤校長は、自らが質素な生活に心がけていたことから、自然と学校にも『質実剛健』の気風が根付いてきた。その『質実剛健』の気風を創るのに役立ったのが、山野を歩き回る「歩け歩け運動」であった。この伝統が後の強行遠足となり、現在まで続いているのである。しかし、開校当初の遠足は、とても現在の遠足と比べようがないものであった。

開校当初の学校には、山歩きの好きな佐藤校長、26 歳の教頭、平均年齢が 23~24 歳という血気盛んな 5~6 名の青年教師がそろっていた。佐藤校長は、学校の遠足だけではなく、いつも生徒を連れて歩いていた。しかし、当時は地図が無く、北海道庁から開拓用の地図をもらってきて、その実地踏査のつもりで歩いていたという。

第 1 回生が大正 11 年に入学して昭和 2 年(1927 年)3月に卒業するまでの間、遠足などの記録としては、次のようなものが残っている。

1 年生の時には、野付牛(北見)から温根湯まで歩き、帰りは留辺蘂まで歩いている。距離は 46 km で、留辺蘂からは汽車に乗って野付牛まで帰って来た。中学 1 年生というと、高等小学校を卒業してから中学校に入学してきた者もいたが、そのほとんどが 13 歳の生徒達であった。

2 年生の大正 12 年 5 月 24 日、1・2 年生 170 名が網走まで行き、藻琴湖に出て風景を楽しみながらシジミトリをして網走まで戻る。網走からは汽車で野付牛に帰ってきた。

同年 8 月 18 日、阿寒登山隊が出発する。これは、希望者をつのり、2 人の教員と生徒 7 名が 4 日間の行程で美幌から歩き、津別から本岐を経て相生の駅通(公設の簡易宿泊所)に宿泊している。翌日、雌阿寒登山をして山越えして戻り、山浦旅館に宿泊する。次の日には本岐に戻り、宿泊して美幌へ帰って来た。

同年 9 月 7 日、チミケプトウトウ(『沼』の意味)へ全校生徒(1・2 年生)189 名と職員 9 名、案内者 5 名の合計 203 名で、午前 7 時 15 分に出発する。模範林(現:津別町最上)までは道があり、木こりが通る程度の道を進む。熊笹を分けて進むが、あちらこちらに熊の糞や熊が掘ったばかりの穴がある状態で、行けども行けども湖畔に出ない。そのため、悲壮な覚悟を決めて行軍隊形で寝ることとした。その時、一緒に行った猟師が湖を発見し、全員で湖畔に出、露営の準備をした。当時の生徒の服装は羽織、袴がほとんどで、他に毛布 1 枚、細引 1 本を持ち、5 人 1 組で鍋、米、味噌とネギを大風呂敷に包み、それらを背負っての行軍であった。当時の教務日誌には、「午後 3 時 20 分、更吉朱内橋(現:開成橋)付近で解散した。概して言えば成功なり。但し往年道路の踏査なかりしたため、山路難を感じたり」と記載されている。

4 年生の時の大正 14 年(1925 年)6 月 9~13 日、釧路方面へ遠足に出かける。美幌から歩き、美幌峠を越えて和琴小学校に 1 泊する。翌日は弟子屈で 1 泊し、塘路(トウロ)駅通で 1 泊(当時は、相生線や釧網線などの鉄道が無い時代)、釧路に着いて旅館で 1 泊する。帰りは釧路から汽車で池田経由、池北線(後の『銀河線』で、現在は廃止)で野付牛に帰ったが、距離は往路 240 km の大行軍であった。途中、木こりの通る道や駅通のある道などを通るが、青大将(ヘビ)が道に横たわっていたり、今したばかりの熊の糞があちらこちらにある道を歩き続けた。中学 4 年生は現在の高校 1 年生で、わずか 15~16 歳の少年には無理ともいえる強行軍であった。釧路に着いた時には全員両手に杖を持つありさまで、幣舞橋をよたよた歩いていた。しかし、旅館に着くと、部屋で皆盆踊りをして騒いでいたという。

こうして歩いたことは、単に脚が強くなったというだけではなく、『やり通す』という強い意志の訓練となり、勉強や生活態度に大きなプラスとなったという。言葉よりも自然に接しながらの教育が生徒に与えた影響は計りしれないものがあつた。夏休み中には百里(400 km)を歩き抜く生徒もいて、当時、阿寒などは野付牛中学校の裏庭のような感があつたともいう。

このような気風が全校生徒に伝わり、『へたばるまで歩こう、歩けるうちに歩こう』という伝統となった。そして、それが「強行遠足」へと発展していくこととなる。



チミケツトウへの一泊遠足(大正12年)  
中学1、2年生にとって、チミケツトウまでは大変な距離であった  
写真では、和服で参加している生徒も見られる

## 強行遠足の始まり(第1回~第11回)

記念すべき第1回強行遠足は、昭和7年(1932年)11月12日に開催された。野付牛駅(現:北見駅)前を出発し、留辺蘂・生田原(現:生田原)・遠軽を経て湧別までを予定していた。しかし、みぞれが降る悪天候となったため、遠軽までの距離634kmとなった。

コースは、野付牛駅前→東相ノ内→相ノ内→留辺蘂→ポンカム(現:金華)→上生田原(現:生田原)→下生田原(現:安国)→遠軽までで、鉄道の沿線进行することから『鉄道沿線強行遠足』と称した。

第2回強行遠足は中湧別までの距離796km。

第3回~10回強行遠足は下湧別(現:湧別)までの距離84.5kmであった。しかし、第10回強行遠足では開盛里~上湧別間の橋が流失し、遠軽から上湧別まで汽車で輸送したため、実質距離は729kmであった。

昭和17年の第11回強行遠足は湧別より折返し、汽車の乗車時間で締め切った。その結果、上湧別(距離94.01km)到着が2名、中湧別(距離89.42km)到着が10名、下湧別(距離84.5km)到着が17名であった。

第11回強行遠足までは、1年生は上生田原(現:生田原)、2年生は下生田原(現:安国)、3年生以上は遠軽まで到着しなければ落伍とされた。そして、各地点まで到着すると『完走者』として賞状が出ることから、『賞状線』ともいわれた。

### 第1回鉄道沿線強行遠足実施要領 北海道庁立野付牛中学校

- 1 期 日 昭和7年11月12日(土)
- 2 コース 留辺蘂、生田原、遠軽方面
- 3 所要時間 12時間(自午前6時 至午後6時)
- 4 集合場所 野付牛駅前広場
- 5 集合時刻 午前5時30分
- 6 経 費 乗車賃10銭(全員より徴収)
- 7 賞状線 1・2年 ポンカム 3年以上 上生田原
- 8 通過証 荷札
  - (1) 途中審判ノ記入ヲ要ス
  - (2) 各駅間1軒程
  - (3) 列車時刻表
  - (4) 常紋通過ノ記念スタンプ
- 9 服 装 制服、ゲートル、靴又ハタカジョウ、ワラジ何レモ可
- 10 携行品 オニギリ3食分、手拭、キャラメル又ハ氷砂糖、薬品、時計、着換シャツ
- 11 賞 品 先着順ニ20名ニハメダル、ソノ他ノ賞品ヲ与フ
- 12 規 約
  - (1) 鉄道線路ニハ絶対踏ミ入ラザルコト
  - (2) 乗車列車以外ノ列車ニハ許可ナク乗ラザルコト
  - (3) 常紋ノ通過ハ午後6時以後ハ許サズ
- 13 職務分担 総務部、記録成績調査係、会計係、救護係、途中連絡係
- 14 準 備 足ナラン遠足  
第1回 午後2時間ノ予定

第2回 若松方面へ2時間授業後

第3回 仁頃方面へ1日間

以上ノ外各学年ニ於テ適当ニトラックヲ 15 分程度ニ走り、充分ニ準備シテ置クコト



第1回強行遠足 野付牛駅(現:北見駅)前集合・出発  
昭和7年(1932年)11月12日



下湧別の最終着点に到着した生徒達



昭和16年の強行遠足の様子

## 最長の101.7 km(第12回)

昭和18年(1943年)の第12回強行遠足でコースが変更された。北見(野付牛改め)から置戸～留辺蘂～北見～美幌までの距離101.7 kmに及ぶ、強行遠足の歴史に残る最長距離になった。コース変更の理由は、昭和15年(1940年)に遠軽中学校(現:遠軽高等学校)が設立され、遠軽・湧別方面からの入学生が少なくなったことによる。強行遠足では保護者による関門での接待が必要不可欠であり、その担当者が不足したため、コース変更につながったのである。最長距離になったもの、北見到着者が315名。端野到着者が59名。緋牛内到着者が39名。美幌到着者が26名であった。

第12回強行遠足以降は、北見まで締め切り時間内に到着しなければ完走とならなくなった。



昭和18年 第12回大会の様子  
わらじ履きが多かった

## 解説

### 関門

各関門には締め切り時刻が設定されていた。その時刻までに到着しなければ、次の関門に行っても帰りの汽車に乗り遅れてしまうため、そこで止められてしまった。そのため、歩き通しでは各関門の締め切り時刻に間に合わず、コースの半分以上は走らなければならなかった。

### 服装

昭和20年(1945年)の終戦までは軍国主義時代であり、生徒は制服・制帽で、ほとんどがわらじ履きであった。昭和12年(1937年)に日中戦争が勃発してから以降は、ゲートル(脛部分に巻かれる布等をいう。ズボンの裾を押さえることで活動時にズボンの裾が乱れない様にする)と、障害物等で足元を怪我しない様にする等が目的の被服を巻いて走るようになった。

食事は口に入る程度の小さなお握りを10個くらい風呂敷に包み、ほどけても落ちないように縫い合わせ、肩に斜めにかけるか、腰に結んで走った



戦前の強行遠足の服装  
制服・制帽にゲートルを巻き、わらじ履き  
生徒は中学1年生(12~13歳)から5年生(16~17歳)までが参加し、写真のように体力の違いがあった

### 接待

関門は駅の前に設置されることが多く、各関門ではその地方出身の生徒の保護者が接待を担当してくれた。長距離を歩いてきた(走ってきた)生徒に対して、栄養分や水分を補給してあげる手伝いを指す言葉で、戦前・戦後の物質の少ない時代には、砂糖湯・キャラメル・牛乳等が出された。カボチャ・山ブドウ等も出されていたが、最終地点の湧別では旅館の一室でお膳つきのご馳走が出されたこともある。

## 環状コースが誕生(第13回～第35回)

第二次世界大戦が激しさを増し、敗戦の色が濃くなってきた昭和19年(1944年)、ほとんどの生徒は勤労動員で農家に出かけ、跣足鍛錬(はだしたんれん)も出来なかった。そのため、この年の第13回強行遠足からは北見まで距離732kmの環状コースとなった。

昭和25年(1950年)、本校は北見北斗高等学校と改称され、男女共学となった。この年の強行遠足は中止されている。その理由は、女子が男子のコースと同じでは体力的に問題があるというものであった。「女子生徒の自由参加」等の意見もあったが、結果的に中止となった。しかし、運動部や強行遠足を実施したいという生徒達の強い要望があり、翌年、北見～訓子府～中ノ沢～相ノ内～北見までの女子コース距離39.6kmを設定し、再開された。

出発は男子が午前4時、女子が午前6時で、相ノ内で男子は女子と合流することになっていた。しかし、実際には男子の上位の者のみが出合うだけで、女子の方が先に到着する結果となった。前年は女子の体力を考えて中止されたが、結果的に女子の完走率は90%以上となった。

なお、出発地点は野付牛駅(限:北見駅)前で、ゴール地点は旧西小学校門(現:北見市図書館と勤労青少年ホームの間)で、昭和42年の第35回強行遠足まで続いた。



男女コースが設定された昭和20年代強行遠足 男子は午前5時出発でわらじ履きも多い

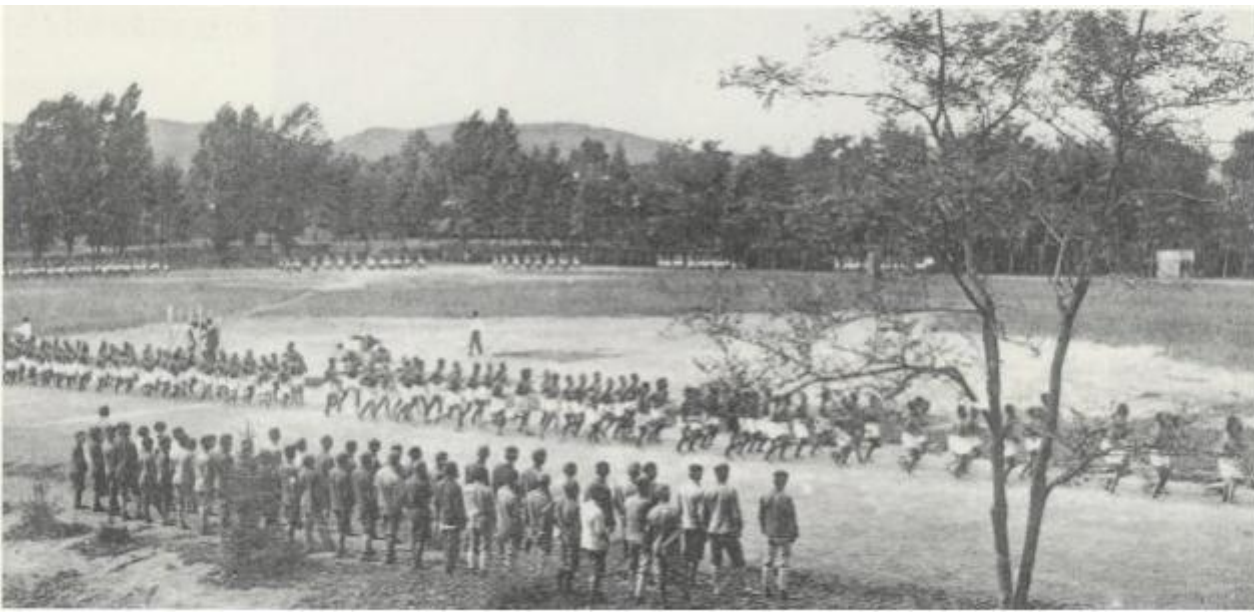


昭和30年代の女子の出発風景 午前6時に旧北見駅前を出発した

### 解説

#### 跣足鍛錬(はだしたんれん)

昭和15年(1940年)から昭和19年(1944年)までの放課後、全校生徒(身体の具合の悪い者を除く)がパンツ1枚の裸となり、はだしでグラウンド400mを5周した。土曜日には25周の1万歩を走り、強行遠足のための体力づくりをしていた。これを跣足鍛錬と称している。戦後は実施していないが、強行遠足のために自主的に走っている者も多かった。現在は体育の時間に校舎の周囲を走ったり、部活動ごと放課後に走ったりしており、各自で体力づくりをおこなっている。



5～9月までの晴天の日、パンツ1枚でグラウンドを5周する跣足鍛錬



## 交通事故でコース変更(第36回～第44回)

昭和42年(1967年)10月3日、第35回強行遠足の時、留辺蘂～相ノ内間のポン湯付近でバスの前を走っていた1年生が、バスを追い越した乗用車に接触され、転倒するという事故がおきた。幸い、車の速度があまり出ていなかったために1週間の打撲で済んだ。しかし、今後このような交通事故が起こらないとも限らず、危機管理の面からも強行遠足を廃止してはとの意見も出された。そのため、校内に強行遠足コース検討委員会を作り、車輛の通行量が比較的少なく、安全性が確保される新たなコースを定めた。それが、昭和43年の第36回強行遠足から始まるほぼ現在のコースである。

男子は北見～置戸～秋田～中ノ沢～北見までの距離71.3km、女子は北見～訓子府～中ノ沢～北見までの距離40.5kmである。

他に検討されたコースとしては、学校を出発して仁頃通りを下り、国道を横切って旧若松橋を渡り、川東～端野町川向～国道を横切り、忠志、上仁頃～富里～大正～霊園の裏山を越えて学校まで戻る56kmくらいの距離であった。しかし、国道を2度も横切ること、距離が短いこと、大正方面は農道が多く、迷う恐れがあること等の理由で却下された。





より安全なコースを設定する  
女子にとっては長く辛い距離であったが、ゴールの喜び  
を味わうために頑張る

## 出発は北斗高校から(第36回～現在)

北見のスタート地点は、北見駅前から市民会館前、目産自動車株式会社前と変化したが、昭和52年(1977年)の第45回強行遠足から学校出発に変わった。男子のコースは高校を出発後、夕陽ヶ丘通りを走り、8号線から国道を横切り、中ノ沢橋を渡って上常呂へ出るコースである。ゴール地点も、旧西小学校前(現:北見市立図書館と勤労者青少年ホームの間)から常盤公園となり、距離数は726kmとなった。

女子のスタートも本校出発となり、コースも変更した。それまでの訓子府市街地の自動車整備工場横から中ノ沢に出るコースを、市街地はずれの坂井石油スタンド横から西25号線を経由して中ノ沢に至るコースとなり、距離は405kmとなった。

ただし、男女コースとも道路工事等により迂回したり、近道を通るため、少しずつではあるが距離は毎年異なっている。昭和53年の第46回強行遠足は、秋田～中ノ沢間が道路工事のため、秋田から北連農場の周囲を経て中ノ沢に出たこともある。



北斗高校のグラウンドが出発地点となる

## 定時制の参加

昭和23年(1948年)10月、北見北斗高校に定時制課程が発足し、翌年の第18回強行遠足から定時制課程の生徒も走った。定時制には旧制中学校を卒業して4年生に編入学した者もたくさんおり、第18回強行遠足の優勝者は定時制の生徒であった。優勝者は卒業後、国鉄(現:JR)スキー部のレースで全道優勝を何回か経験したランナーであった。定時制の生徒も頑張って上位になった者も多い。全日制の生徒は、体育の時間や放課後に、強行遠足のためのトレーニングで数km走っていた。しかし、定時制の生徒は日中は勤務があり、夜間の練習も不足になるため、参加率も低くなる。特に、体力の限界まで挑戦すると翌日の勤務に支障があり、完走出来ないのも止むを得ないことであった。



## スタートとゴール地点の変遷

強行遠足のスタート地点は、第1回(昭和7年)から第35回(昭和42年)まで野付牛駅前(現北見駅)であった。しかし、駅前の国道では早朝からダンプカーが往来するようになってきた。また、集合場所の駅前は薄暗く、朝3時頃から電灯をつけてもらうためには、助役をお願いして駅のホームで点灯してもらわなければならなかった。さらに、汽車の運転手が早朝仮眠しているため、駅舎の前で騒がれるとうるさくて眠れないと苦情が出ていたことと、4時のスタート後に貨物列車が通過するため(現在のように石北線が高架されていなかった)、出発点を市立図書館前に移動し、ゴールも新西小学校校門横とした。ただし、翌年から常盤公園となっている。

その後もスタート地点が数回変更されているが、その理由はトイレのためであった。男子の集合は午前3時半で、午前4時出発まで初秋の朝は寒く、時には薄氷が張っている。寒いためにトイレの使用が頻繁になる。図書館や市民会館を開けてもらって使用させていたのだが、一般職員は勤務外で頼めないために、館長や、係長に早朝から対応していただいていた。このような不便さから、常盤町の目産自動車株式会社前を借りたこともあった。

第45回(昭和52)からは北見北斗高校がスタート地点となった。本校を出発し、夕陽ヶ丘通りを走って8号線から国道を横切って豊地を通り、上常呂小学校横から置戸道路に出て、従来のコースに合流した。帰路は、豊地を通り、中ノ沢橋を渡ってサイクリングロードに入り、常盤公園のゴールに到着するようにした。しかし、8号線通りの中ノ沢橋あたりではダンプカーがすれ違う時に起こす風圧が強く、歩行中の生徒にとって極めて危険な状態になってきた。併せて、教師と保護者による交通整理も次第に難しくなり、事故が起きかねない状況になってきた。そこで、第53回(昭和60)からは、豊地から工業団地横を通って武華橋を渡り、サイクリングロードを経て、常盤公園のゴールに入るようにした。

第59回(平成3年)からは、夕陽ヶ丘通りから6号線を通り、新しい豊大橋を渡って豊地に向い、上常呂に至るコースとなった。



昭和41年(1966年)のゴールの様子  
現市立図書館入口前(旧西小学校正門前)



常盤公園にゴールが移動する



昭和50年代 常盤公園でのゴール後の様子

## 栄光の3年連続優勝

旧制中学時代、5年間で3回優勝者は石川茂氏(10期生:昭和10年3月卒業)、坂井靖男氏(21期生:昭和21年3月卒業)の2名である。新制高校になってからの3年連続優勝者は、男子が金内隆宜氏(58期生:昭和58年3月卒業)1名、女子が太田千恵子氏(51期生:昭和51年3月卒業)、伊藤真起子氏(59期生:昭和59年3月卒業)、稲田佳子氏(65期生:平成2年3月卒業)の3名のみである。いかに3年連続優勝することが難しいことか、ご理解いただけるであろう。

強行遠足3年連続完走バッチのデザインの内容



3年連続強行遠足を完走した生徒には、完走バッチが贈られる

---

## 第一回優勝者からのプレゼント

第1回強行遠足優勝者は、手をつないでゴールインした福羽二郎氏(7期生)と石川茂氏(10期生)の2人であった。福羽氏は、「強行遠足は自分の人生に大変有益であった。強行遠足のために使ってください」と、昭和37年(1962年)から毎年1万円を寄付して下さった。また、優勝者にバッチを寄贈したいと申し出られ、藤原和夫氏(20期生)が図案を作成した。男子には校章の図案のキーホルダー、女子には月桂冠の中に校章を入れたネックレス(それぞれ純銀製)が贈られることとなった。また、福羽・石川両氏から優勝杯が寄贈され、石川氏から寄贈されたものを女子の優勝盃とし、福羽氏から寄贈されたものを男子の優勝盃とした。

昭和57年(1982年)、北見北斗高校の創立60周年記念式典の際、福羽氏に感謝状が渡された。それに対し福羽氏は50万円を本校に寄贈された。本校ではこの利子の半分を強行遠足の費用に、半分を元金に加えて強行遠足実施基金としている。なお、福羽氏は20年以上にわたっての寄付行為の善意が評価され、昭和61年(1986年)11月、日本善行会より表彰されている。福羽氏はこの受賞祝賀会で本校に50万円の寄付を申し出られ、合計100万円になる強行遠足の資金となった。

現在では、男女の優勝者に福羽・石川両氏から寄贈された優勝杯が授与されるとともに、10位までの入賞者には盾が贈られている。



優勝者 男子 キーホルダー  
女子 ネックレス

福羽氏から寄贈された優勝者へのキーホルダーとネックレス



第1回優勝者から贈られた優勝杯



昭和28年

第28回  
昭和35年

第41回  
昭和48年



昭和32年

第39回  
昭和46年

第47回  
昭和54年

完走した生徒には、毎年生徒がデザインした完走バッジが贈られる

## 「いつもでない一日」が放映

強行遠足は毎年、各放送局によってニュースとして取りあげられてきた。

NHK放送局から、昭和44年(1969年)10月8日の強行遠足を特別番組として制作したいと申し出があった。当初は、優勝者の今まで歩いてきた半生を「ある人生の記録」としたかったようだが、全国に散在している優勝者たちの取材は困難なため、この一日を全国のNHKの新人研修会にしようと、全国から37人の新任者が北見に集められた。当日は、様々な箇所で撮影され、ヘリコプターも2機用意して撮影された。そして編集・放映されたのが『いつもでない一日』であった。北海道では昭和44年12月8日に55分番組として放映された。全国には翌年1月11日に50分番組として放映された。当時は全国的に学園紛争が盛んな時代で、「このような時代に、素晴らしい行事だ」と、全国から賛辞が送られてきた。

次いで、第49回強行遠足(昭和56年10月8日)をNHK教育テレビ「高校生の広場」の教材として撮影したいと申し入れがあった。長時間かけて取材したものを20分番組としてまとめ、10月18日と28日の2回、NHK教育テレビで全国放映された。内容的に一部、

意に沿わない生徒の態度もあったようだが、ホームルームの教材としては十分利用できるということで、大きな反響が全国から寄せられた。



昭和44年 NHKで強行遠足が放映された

## 多くの方々に支えられて

強行遠足のスタート時間は、男子が午前4時、女子は午前5時である。当然、公共交通機関は動いていないため、保護者は真夜中から子供の登校の準備をし、北見市内や市外から学校まで送り届けてくれる。自家用車が普及していなかった頃は、北見市外からの列車通学生等は知人、友人の家に泊めてもらい、これが現在も強い友情の絆となっている。

強行遠足は、コース沿線の町、警察、交通指導員、万が一に備えての救急病院、関門付近の公共施設(電話、トイレ等の借用)、地域の方々の協力が必要不可欠な行事である。また、各関門のPTA支部では保護者やPTAのOBが早朝から関門設置の協力、接待、交通整理をしてくださっている。

戦前・戦中・戦後の物資の無い時代の関門の接待は、ワラジの履きかえ用意、リンゴ、山ブドウ、トウキビ等の接待で、砂糖湯などは上等の接待であった。そのうち、留辺蘂関門で保護者による汁粉の接待が始まった。女子は相ノ内に出ることから、相ノ内でも女子用に「しるこ」が用意された。現在は、中ノ沢で「しるこ」を出すように保護者が協力してくださっている。また、ゴールでは保護者が真心を込めて作る「うどん」が待っている。

コースでは、保護者による交通整理と誘導が行われる。過去には、ハムの免許を持っている保護者が走行状況を連絡してくれたこともある。保護者で医師免許所有者や看護師免許所有者、養護教諭免許所有者は、各関門における治療・看護の手伝いに当たってくれている。他にも、ボランティアとして整骨医や本校OBの看護学生、大学生などが多数裏方として強行遠足を支えてくれており、それが長く学校行事が続く原動力となっている。ちなみに、平成21年度の第77回強行遠足では、約560名の方々にお手伝いをいただいている。



各関門では、支部の保護者が中心となって栄養補給にあたっている(写真は訓子府関門)



関門ではボランティアの医療関係者が生徒の体調維持にあたっている



保護者のみならず、同窓会「とどの実会」も物心両面で強行遠足を支えてくれている



お手伝いの保護者は、救急説明会や各係の説明会に参加して準備にあたっている

## 甲府第一高校との交流

平成3年(1991年)4月、本校第19代校長として本校第28期卒業生の齊藤静之氏が着任した。翌年の平成4年は本校の創立70周年記念の年であった。齊藤校長は、自身が東京教育大学1年生の頃、同じクラスの友人に甲府第一高校の卒業生がおり、彼から北見北斗高校と同じ強行遠足を行っている様子を聞いていたことから、創立70周年の記念イベントとして両校交流の強行遠足を思い立った。

5月に東京で開催された全国高等学校長研究協議会で、甲府第一高等学校の廣瀬重雄校長を訪ね、主旨を説明したところ、廣瀬校長から「交流というとすぐ国際間のことを考えるが、同一行事を通して、山梨と北海道の高校が交歓することは素晴らしいことである」との言葉が寄せられた。齊藤校長は、平成3年8月19日に開催された「創立70周年記念協賛会第1回代表者会議」で、「甲府第一高等学校との強行遠足による交歓」と「同窓生による記念講演会」の二つを提案し、了承された。

甲府第一高校でも検討の結果、全職員が賛意を示したことから、両校の教諭が事前視察として相互に派遣された。そして、平成4年、北見北斗高等学校第60回強行遠足は10月4日(日)に、甲府第一高等学校の第66回強行遠足は10月13日(火)～14日(水)に実施され、両校から生徒4名(男女各2名)、引率教諭2名、校長の計7名が派遣され、強行遠足に参加した。

平成4年12月3日、北見北斗高校創立70周年記念協賛会の解散総会が開催された。この総会で、強行遠足の交流が成功に終わったことから、この交流事業を継続するために余剰金の一部を使用させて欲しいとの提案あり、満場一致で承認された。ただし、この交流会を毎年行うのは経費面で難しいことから、3年ごとの交流とするとし、本校同窓会長と学校長が甲府第一高校を訪れ、甲府の高校の同窓会長、学校長との間に文書を交換した。



山梨県立甲府第一高等学校



平成4年の交流での出迎え風景

## 山梨県立甲府第一高等学校

山梨県立甲府第一高等学校は寛政年間、甲府城南の地に設置された甲府学問所を前身とする官学徽典館を淵源とする学校である。明治6年(1873年)5月に開智学校と改称され、以来何度か校名の変更と合併統合が行われ、平成2年に創立110周年記念式典を行った名門中の名門校であり、甲斐の国の中心学校として、隠然たる歴史と伝統を誇っている。

強行遠足の第1回目は、大正13年(1924年)11月に実施されている。今まで3回中止の年があったが、平成21年には、83回目の歴史を刻み、本校より6回多い実施回数である。

本校と同様、学校制度の改革や男女共学によりコースも距離も何度か変更されている。現在では、男子が甲府～韮崎～野辺山～臼田～小諾までの103km、女子は須玉町～野辺山～小海までの46kmを男子は午前2時半に出発して夜中を徹して歩き、女子は午前6時30分に出発し夕方までに小海に着き、帰路は男女ともJRを利用して帰校することになっている。男子の出発点は海拔285m、最終地点は海拔680mで、高低差は395mもある。女子の高低差は315mで、途中海拔1375mの地点を通る。つまり、山に登って行くコースで、歩くことを主眼としている。

甲府第一高校も本校と同じように、最初の頃は「鉄道沿線強行遠足」と称していた。

昭和60年(1985年)第60回記念として「強行遠足記念像」が建立され、記念像に「君よ走れ新たな歴史を創る道程」の一文が刻まれている。

